

雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告

市川 健 二郎

はじめにおことわりしなければならぬことは、この文が石寨山に關する私の二度目の書評だということである。既に先約の民族學研究（二四卷・三號）に内容紹介を記した。その時の氣持では輕々しく論評することを避け、まず内容の正確な紹介とこの發掘の持つ意義とを記すことを第一とした。その後、華南及び東南アジアの先史學・人類學を調べるに當り、この報告書を繰返し利用するにつれて、批評すべき問題が幾つも生まれて來た。丁度その折に本誌から書評の依頼があつたので、前稿の内容紹介に續く論評という意味で、前稿と重複する箇所を省き記すことを約束した。そのため、報告書をまだお讀みにならない方には不親切だが、改めて御覽戴くか、或はお急ぎの方は民族學研究の前記内容紹介を一讀して戴くことにして、直ちに論評に入ることとする。

一。遺跡は滇池の東岸にある小山（高三三米）の東南中腹にある。この書はその第二次發掘報告書である。崖石の僅かの隙間の地を利用した漆棺を中心とする墳墓が合計二十基あつた。報告者はこれを四類型に分け、第一類型（西漢早期）、第二類型（西漢中期）、第三類型（西漢中期）、第四類型（西漢晚期）に編年している（一三三頁）。確かに遺物の内容から見て、西漢を中心とする時代（或

は戰國末に遡るかも知れない）の墓であることには間違いない。ところが、これらの墳墓は崖石の間の地を利用してゐるため、その封土、槨の状態がわからない。木棺の殘片が僅かに残つてゐるだけなので、墓群を類型に分けることは難しい。だが、報告者は敢て合計二〇基の墓を第一型四基、第二型一〇基、第三型四基、第四型二基に細分している。恐らく「長沙發掘報告」の類型に基いたものであろう。しかし、長沙と比較して、墓坑の形が不明でしかも出土状態が良くない雲南の僅か二〇例を四類型に分類することは冒險である。同様のことが青銅戈を九型に、青銅矛を十一型に、青銅劍を十三型、青銅斧を四型、同鋌を九型、同鏃を十型に分類する方法についても言える。例えば青銅劍の場合は二例だけで、又青銅鉞の場合は一例だけで夫々一類型を作つてゐる。しかもM四一三、M三一三〇の兩劍を見ると、破損部分の接合補修がいかに不自然に見える。明らかに接合し得ない二つの部分を無理に接着した感がある。中國考古學者の飛躍的な技術の進歩にも拘らず、尙より一層正確な技術による復元と、確立した方法論に基く類型法を私は望んでゐる。

二。第六號墓發見の滇王金印から見て、滇王及びその一族の墓但し八・九兩號を除く）とする考え（一三四頁）は文献と照合してまず妥當な説と言へる。けれども報告者は遺物に少數民族の特色が濃厚である點を指摘し（一三五頁）、漢代の中國文化がいかに四夷に浸透したかを強調して、雲南独自の發展による青銅器文化ではない（一三七頁）と説いてゐる。まことに尤もであるが、その

焦點はあくまでも漢文化の傳播にあり、肝心の滇王がどのような民族で、どのような生活と交易とを行い、どのような祭を行っていたかという問題には興味を示さない。従つて、東南アジアの類似遺物との比較を念頭に置いた遺物の解説は見られない。漢文化の影響を受けた少数民族の遺跡であれば、當然その民族の姿に焦點を向けて良い。

三。青銅器上の狩獵の場面から、「狩獵は當時滇池區域の經濟生活の中で相當重要な地位を占めていた」（一三六頁）と断定し、青銅器上の牛の表現は「明らかに牧畜經濟の發達を現わす」（一三六頁）と説く。ここにも問題がある。農耕社會の祭に狩獵の儀禮が存在して悪い理由はなく、供犠の牛が多いことは必ずしも牧畜經濟の發達を示す證據とはならない。農耕の祭に牛を數十頭も殺し供える風習は遊牧民の社會よりも寧ろ農耕社會に存在する。同博物館の「晉寧石寨山出土有關奴隸社會的文物」（文物・一九五九・第五期）では「滇池の民が定住し農耕を行つていた」（五九—六一頁）と見ている。豊富な青銅農具遺物及び青銅器上の祭の場から見て、この解釋の方が妥當である。青銅型二件、同鋤二件、同鋏五件、同削二六件、同鎌五件、同斧一〇八件、同鋸一件、同鑿二三件、同鋸一件の出土品は滇池湖畔で農耕定着の生活をしていたことを物語る。圖版一二二の青銅鼓文様の左から三及び四人目の人物が持つ鋤は曲つた木柄を付け柄端に小さな横木のある農具である。恐らく牛耕の犁ではなくて、人力による鋤であろう。このように定着農耕の社會と解釋するのが正しい。

四。湖畔の農耕社會で行う祭が祖先祭と結び付く農耕の祭であるならば、そこに首狩（挿圖二六）、巨石柱、牛の供犠があることは極めて自然である。従つて牛を曳く行列の場面を「市場での交易の光景」と見る解釋（七六頁・一三六頁）はむしろ供犠の場への牛の歩みと解釋した方が良い。又「大量の牛を國外へ輸出した」という推測（一三六頁）は餘りにも現代的な經濟感覺である。當地の聖牛の崇拜は遺物によつて明らかである。この場面は市場ではなくて祭の場である。又青銅器の中に多量の子安貝があるからと言つて、それを直ちに「當時の商品經濟が相當活潑であつた」と見ること（一三六頁）は早計である。この王墓からは半兩泉三枚、五銖錢一八〇枚を發見している。だが、これらの貨幣と子安貝とを同じ副葬の氣持で納めていない。又祭の青銅柱上の蛇、兵器、工藝品その他に現わした蛇、金印の蟠蛇鈕などは蛇トートテム崇拜であると断定している（一三六頁）。この點も、トートテムという語をどのような意味で使用しているか疑問に思う。確かにトートテムがあつたという可能性は強い。しかしその社會集團全員が蛇トートテムと何らかの特殊な關係を持つていたということを遺物だけから直ちに断定出来ない。

五。貯貝器上の青銅人物を解説するに當り、第一次發掘の報告ではこれを「墓の主人公」（考古學報・一九五六・第一期）とし、第二次發掘に基く本書では「墓の財寶の守護者」（一七頁）と改めている。私の考えではこの人物を寧ろ祭祀者とする方が良いと思う。なぜかという、この人物は武器を持たない。兩手に捧持

する棒はその先端に鈴付傘を付けている。又、この人物以外に青銅器の四周に武裝の男子が立つている場面がある。又棒を持つ人物の中に明らかに女子と見做すことが出来る像がある。この種の像を付けた青銅器について、「青銅鼓は元來樂器であるが、墓中ではすべて子安貝を貯藏する役を果している。又青銅鼓を模倣した専用貯貝器もある」(一七頁)と記している。ここでは青銅鼓が本來樂器であつたに相違ないという考えを前提にしているが、問題とならう。當地の青銅鼓は年代から言つても東南アジアの例よりも古く、最古形式と見て良い。桶形青銅器も鼓形青銅器も共に貯貝器である點ではなんらの區別もない。青銅鼓の使用法について、「棒を地上に立て横棒を渡しこれに鼓の耳を通し棒で敲く」(七六頁)というが、これを證據立てる遺物はない。又、青銅高床家屋(圖八六・一)には「銅鼓を敲く姿が見える(九三頁)」と記している。圖から判斷すると、青銅鼓上に或種の供物が置いてあり、人物の手にする用具がその供物を挟んでいるように見え、どうも鼓を敲いている姿とは思えない。青銅容器上の供物の場面から見ると、青銅鼓は元來犧牲を供える聖なる場であつたらしい。巨石柱に縛りつけられた人物、蛇、牛及び供物を煮る釜などは聖なる供饗の場を示している。又轉じて魂呼びの場となる。一女人が鼓上で鈴の付いた傘狀の棒を持つて座つている姿は日本の天岩戸の前の「覆槽を踏み轟かし杵衝き鳴らす」神降しの場と相通ずる場面ではないか。インドシナ發見のゴクリュとホアンハの青銅鼓に畫かれた豎杵式の衝きならし方法は雲南青銅鼓上に座る女人

が豎杵様の鈴付傘の棒を衝く方法と一致している。その點で報告書の青銅鼓の解説とは別の考えを私は持つている。

六。前述のように、本書は雲南の持つ青銅器文化の意味について詳しく記していない。唯、漢文化がいかに僻地に及んだかを強調している。もつとも他に「晋寧石寨山出土有關奴隸社會的文物」(前掲書)を記しているが、ここでも滇池の民がどのような生活をし、どのような交易をし、四圍の地とどのように影響し合つたかという立場から解説していない。研究方法についての見解の相違かも知れないが、この點には物足りない感がある。楚の漆器文化の影響だけでなく、巴式青銅劍、蜀の崖墓との關係、盤廻しの長身異裝の男子二人(圖六八)をめぐる大秦幻人のビルマからの交通路などの諸問題に關心を示して欲しかつた。又雲南の青銅鼓は當然貴州省興義・廣西省貴縣出土の青銅鼓を仲介とする西江、廣東へのルートの存在を證明する。尙、第一次發掘の時に貝塚から出た印文土器については、唯「新石器時代の遺物」(考古學報一九五六・第一期・六二頁)として片付けているが、華南東海岸を南下した印文土器文化との交流は同様に西漢代に當てて良い。雲南とインドシナとの青銅鼓には共通する鳥の假裝人物の圖がある。だが、雲南の牛と蛇との圖様はドンソン文化の蛙、鹿、龍などの圖様と異つた性質のものである。この點にも注目してほしい。

以上のような諸問題はあるが、何と言つてもこの報告書に盛られた豊富な資料は貴重なものである。昆明の地は金沙江を通じて

四川盆地へ、イラワジ、サルウィン、メコン、ソンコイの諸河を通じて南へ、更に西江を通じて東へと結ぶ。この地にはモン・クメール系を基調とするタイ系種族が案外古から居住し、遠隔地と交易していたのではなからうか。とにかく、この報告書を除いて東南アジアの青銅鐵器文化を論ずることは出来ない。

後註

一、本報告書以後の第三次發掘の畧報が「考古」一九五九・第三期及び第九期に載っている。

二、石寨山關係の論文目錄を作り、「民族學研究」拙稿末尾註にまとめておいた。

(文物出版社、北京、一九五九年、二卷。第一卷、本文一四二頁、挿圖三〇。第二卷、圖版、一二六頁)。

金谷 治著

秦漢思想史研究

山田 統

本書は『秦漢思想史研究』とまことに意欲たくましく題名されているが、それは、おそらく、著者の念頭に熾烈な意欲とともにある研究テーマであつて、本書で事實とありあつかわれているのは「秦から漢初へかけての思想史」(一五頁)すなわち「秦漢期」のそれであり、この時期を著者は「思想史的にはいわゆる先秦諸子の思想と漢王朝の儒教的イデオロギーとの間にはさまつた、い

わばつなぎの時代」(一五頁)であり、「この期間にはむしろなお戰國諸子時代からの繼續で、それが終末をつげたのは董仲舒の哲學にもとづく武帝の思想統一によつてであり」(一九—二〇頁)「それは、著名な諸子時代の繼續としてそれを終結する性格を持つとともに、また新しい時代を建設する積極的な意味をも藏するものである」(二三頁)と規定する。

この時期の思想史的な地位づけは、禮樂説・大學・中庸・禮運・易傳の思想など、主として儒家的思想を中心としてであるが、すでにかつて馮友蘭氏の『中國哲學史』(一九三四)でころもみられており、また本年米壽の賀を迎えられた津田左右吉氏の中國古代諸思想の展開を發展史的にとらえて體系づけようとした諸研究において、きわめてすぐれた方法論の提示のもとに指導的なみとおしたがたてられており、資料分析的な研究としては、内野熊一郎氏に『秦代に於ける經書經說の研究』(一九三九)、『漢初經書學の研究』(一九四二)、『今文古文源流型の研究』(一九五四)等の諸勞作があり、著者の師の武内義雄氏にも、文獻批判を中心としての『易と中庸の研究』(一九三四)、『論語の研究』(一九三九)などの注目すべき研究がある。しかし、これら、ことに邦人の研究は、主として個別問題の發展史的研究あり、あるいは資料・文獻の靜態的分析であつて、この期の思想史を總合的にはつきりとした問題意識をもつてとらえたものとはかならずしもいいがたい。したがつて、それらのなかにはすぐれた示唆はありながらも、秦漢期の思想的情況が脈動的にとらえられているとはいいがたく、秦漢